

氏名(本籍)	まえ ばやし きよ かず 前 林 清 和 (京 都 府)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 2186 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	近世日本武芸思想の研究

主 査	筑波大学教授	文学博士	佐 藤 貢 悦
副 査	筑波大学教授	文学博士	伊 藤 益
副 査	筑波大学教授	Dr.Phil,博士(文学)	佐久間 秀 範
副 査	八洲学園大学教授	文学博士	高 橋 進

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、近世武芸を日本中世の「道」に基づく実践哲学と捉え、そこに看取される心法・技法・技術観・心身観を中心課題に据え、近世武芸伝書等に対する資料分析を通じ、その思想的意義ならびに後世に対する影響を闡明することにある。

本論文は、第一章「道の思想」、第二章「修行論」、第三章「心法論」、第四章「技法論」、そして「結論」の五章から構成される。各章の要旨は以下の通りである。

第一章において、著者は、きわめて高度の専門性、技術性、芸術性を備えたものを意味する「道」なる観念が、論理的深化を経て思想的に確立されたのが中世であったと捉える。その例証として、まず道元の「身心脱落」、「只(祇)管打坐」を取り上げ、無常を契機として一切を捨棄し自我を離れた境地において身心を統一する修行の過程そのものが「道」であったという。さらに、能楽の「道」を世阿弥の能楽論のなかで探求し、厳しい身体訓練を要求する能楽そのものが日常のすべての行動を律する「道」であったとする。そして、鎌倉期の「武士のならい」としては、武術としての「弓箭の道」が重視されたと同時に、主従の結び、名を尊ぶ、恥を知る、不言実行等の精神性(徳目)が重んじられたと述べる。戦国武士に至って、下克上という厳しい現実相のなかにいっそう文武両道が求められ、慈悲深く礼儀を弁えた威厳ある指導者(大将)像が理想とされたとする。こうした理解を踏まえて、著者は、近世の武芸における「道」の思想を、剣術流派である新陰柳生流、二天一流、夕雲流、起倒流のなかに看取し、各流派が中世からの「道」の思想をどのように取り入れつつ武芸独特の「道」の思想を展開したのかを分析している。

第2章において、著者は、武芸の「道」を実践するための修行へと論を展開し、武芸における修行の基本をなす「型」は実戦で勝ち抜くための手段であるという観点から、文芸の「型」との比較を通じてこれを明らかにする。著者によれば、「型」の修行を通じて技術を習得することは、いふなれば鑄型に身体を嵌め込むことであり、そのことは同時に「心」をも「型」に嵌め込むことになる。そのことが流派の理念、精神を体得するという意味で「心」の深化につながり、この点は文芸のそれにも妥当するものの、武芸における「型」は、それを演じること自体が自己目的化されているのではなくして、むしろ技を習得する(道を得る)ための方法であり、その究極には実践に臨んでの応用という課題が控えているという。

著者はついで、武芸修行の精神的領域にかかる瞑想について、その特質を明らかにするために、各剣術流派にみられる瞑想修行について分析する。それによれば、本来的に生死に関わる武芸では、技の修行はいうまでもなく「心気」の修養が重視され、坐禅といった仏教的瞑想修養を取り入れることによって「心」の鍛錬、深化あるいは「気」の強化を目指した。近世に入り実戦性追求の必要性が薄れるにつれて、武芸者たちはさらに自己の内面へと目を向け、禅思想等をよりどころに武芸者としてあるべき精神性、心的状態といった方向に探求を深め、種々の瞑想修行を考案実践し、流派によっては「型」そのものにも精神性重視の内容を盛り込み、動的瞑想法としての「型」をいっそう強固に確立していったという。

第3章において、著者は、実践場面を想定しての「心」の持ちようすなわち「心法」に関して、「心」と「気」の関係を念頭に置きながら、新陰柳生流、二天一流、夕雲流、起倒流、天神真楊流、日置流竹林派に展開された心法論を考察対象とし、そこにみられる「心」もしくは「心身」に沿ってその本質を分析している。著者は、その当時禅宗の「悟り」体験との類似性に関心が向けられていたとする理解に立って、立ち合いの場を想定しての「平常心」や「不動心」が新たに攻究の対象とされたのに加え、「心」の問題とともに重視されたのが「気」であったという。ここで著者は、「気」は本来不随意的なものであり、それをコントロールするためにユング心理学でいうところの無意識の領域を開発しなければならず、したがってそこにこそ武芸各派が瞑想修行を真摯に探求した理由があったと主張する。

第4章において、著者は、具体的な技法としての「間合」、「拍子」、「目付」等の術語を手掛かりに、剣術、柔術、弓術の中核をなす理論へと分析を進め、その背景にある技術観ならびにそれとの関連から心身観（身体観）についても考察する。著者は、日本の武芸論における心法・技法の問題は、たんに精神と身体という枠組では論じられない性質のもので、そこには「心身不可分」と呼ぶべき観念が内包されていたといい、これこそが日本独特の身体観・心身観というに相応しいもので、わが国の身体運動文化の一大特徴を示したものであると述べる。

こうした一連の論述から、筆者は、以下のような結論を導出する。すなわち、わが国の武芸は、たんなる殺傷技術という枠を大きく踏み越えて、中世文化の影響とくに「道」の思想の系譜を色濃く受け継ぎつつ、近世に至って身体運動文化として開花した。武芸は、その実践を通じて高度な技法論のみならず心法論をも構築・包含し、さらに人間形成の「道」としても体系化されたのである。そこには「心」と「身体」とを別物としてではなく、不可分の関係において捉えることを前提とする観点が如実に示されている。かくて、著者は、一人の人間に対して文（倫理）と武（心法、技法）の修練・鍛錬を要求し、しかも武の鍛錬を通じて文の修養を実現しようという企図こそが、わが国独特の心身観に基づいた思想であるといえ、そうした意味では世界にその類をみない特色ある人間形成論であり、優れた身体運動文化論であるといっても過言ではないと結論する。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の最大の特徴は、その目的のなかにすでに提示されているように、考察対象が倫理思想、武道論、仏教思想、中国思想あるいは歴史学（日本）等の広範な学問分野に関わる諸課題に留まらず、武術や臨床心理といった実践領域における具体的な事象分析にまで及んでいることである。かかる壮大な論文構成が、そもそも何故に可能であったのかといえ、その理由は、武道の実践家にして日本思想史とりわけ武芸論の専門家であり、また臨床心理士としての著者がもつ該博な知識と豊富な体験とに負っていることはいうまでもない。そうした意味において、本論文の構成それ自体が、著者の創見と斬新な視角とに基づいて緻密に構築された論攷であることをすでに示唆する。

より具体的に、本論文の主たる意義についていえば、第一に、武芸論を「心法」と「技法」とに二分した

体系的整理のなかに著者の優れた知見がみい出される。そこには、いわば「殺人」の「技法」としてあった本来の武術が、江戸期という時代相に呼応して、仏教的瞑想もしくは儒教的倫理といった諸要素を包含しつつ、他方で死生の問題が人間存在の内面へと掘り下げられることで「心法」を成立させたことにより、究極的には「殺人剣」が「活人剣」としての「武道」へと昇華されたとする重要な論述が開陳されている。

これと関連して、第二に注目されるべきは、中世の戦場における「武士のならい」に関する論述である。すなわち、「武士のならい」はときに卑劣な行為すらも含むものであったが、反面ではそれ自体のなかにすでに倫理的意識の萌芽を包摂しており、しかもそれが中世的な「道」の理念とも高度の専門性、技術性という点において構造的には通じていたことを闡明した。このことは、中世的な「道」の理念が、たんに後世にまで継承されたというに留まらず、近世という長い道のりを経ながら、武の鍛錬を通じて文の修養を実現しようという文化的企図において武芸の「道」として統合され結実したことを意味する。この主張は、わが国独特の心身観に基づいた身体運動文化が、特色ある人間形成論として構築されたとする著者の結論を説得力あるものとしている。

第三に、近世以来の武芸各派については、これまでに多くの成果が公刊されているが、それらは往々にして原文からの引用そのままの羅列に終始するのが通例であった。本論文の成果として高く評価されるべきは、武芸各派の相互関連に着目して優れた整理を与えながら、かつ著者自身の言葉によって分かりやすい解説を与えたことである。この点もまた本論文全体を説得力あるものとしている。

他方で、若干の難点も指摘されねばならない。たとえば、主に天台・華嚴教学において用いられる「無垢識」などの仏教学用語、ないし中国思想に関わる「形而上下」、「理気」等の概念については、より厳密な解釈が求められる。また、本論文第三章のユング心理学と瞑想とに関する記述においては、著者の創見に刮目すべき点はあるものの、そこには論述不足もあっていささか唐突の感を否めない。あるいは、すでに竹刀打込稽古を創案し、現代の剣道と同じような防具を考案使用していた北辰一刀流に関する記述がやや簡便に過ぎている。さらに、かように壮大な論文構成の常として、細部の論述において粗野であるところも見受けられる。

以上のように、今後の検討に待つべき課題があるとはいえ、本論文は、実に膨大かつ広範な文献資料を渉猟し、きわめて広い視野から体系的に構想されたものであり、近世武芸論を思想研究の対象とした最初の本格的論文である。本論文が提起した知見は多くの創見に富むものであり、本論文が学界に対して貢献するところは誠に多大であり、博士論文として十分に価値あるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。